

イ 徒上〇二、  
 ハ 使行廿八、提摩二、五  
 ニ 徒上〇三、  
 ホ 二 徒上〇三、  
 一 使行廿八、提摩二、五  
 二 徒上〇三、  
 三 徒上〇三、  
 四 使行廿八、提摩二、五  
 五 徒上〇三、  
 六 徒上〇三、  
 七 徒上〇三、  
 八 徒上〇三、  
 九 徒上〇三、  
 十 徒上〇三、  
 十一 徒上〇三、

新約全書使徒パウロピリビ人に贈れる書  
 キリストイエスの僕パウロとテモテラピリビお居どころのキリスト  
 イエスに在すべての聖徒及び凡ての監督執事に書を連る 願く之爾曹我  
 らの父なる神及び主イエスキリストより恩寵と平康を受よ 三 ならんがら  
 始の日より今に至るまで常に福音に與るに縁 われ爾曹を思ふに我神  
 に謝す 五 又恒に爾曹衆の爲に祈求せどに成びて求ふ 爾曹の心の中に  
 善工を始し者之れを主イエスキリストの日々でに全うすべしと我ふかく  
 信す 七 此の如く我が愚人の宜なり爾曹の心に在に縁うら我が縲縄  
 お在るとき及び福音を辨明し之を堅固する時も爾曹の皆我に借に我が受る  
 思に與れバ也 我キリストイエスの心を以て爾曹衆を懇慕ふことば就て  
 其證を存す者ハ神あり 九 又爾曹の愛智識と諸の智慧の中に益 大に  
 爲て最も勝たる所を辨へ知り主イエスキリストに由る義の果を満せて神  
 の榮光と讚美を顯はしキリストの日の爲に潔して過なからんとを祈る 〇

キ 提後十三、十四、  
 五 提後十六、十七、

三 めん爲なり 願くハ兄弟父なる神と主イエスキリストより信仰に加て平  
 康と愛を得んことを 願くハ我儕の主イエスキリストを變らずして愛す  
 る凡の者に思あらんことをアメン

新約全書使徒パウロピリビ人に贈れる書 終

十二 兄弟よ願くハ爾曹わが身に在し所の<sup>かへつ</sup>こと反て福音の進行<sup>しんこう</sup>く助となりし

十三 を知れ<sup>しる</sup>斯て<sup>か</sup>我が縲<sup>むす</sup>縛に罹<sup>かか</sup>りハキリストの爲なること<sup>ため</sup>傲に王を護る所の

十四 陣營<sup>ちんえい</sup>および他の人々にも凡て明に知れたり<sup>しる</sup>十四 わが縲<sup>むす</sup>縛に因て兄弟等おほ

十五 くハ主を信するの心を篤くし益勇て懼るることなく道を傳ふ<sup>つた</sup>十五 また狗忌

と分争に因て<sup>よ</sup>キリストを宣る者あり又善意しに因てこれをなす者あり

十六 彼<sup>か</sup>の我が縲<sup>むす</sup>縛の苦を増加んことを欲<sup>ほ</sup>ひ誠の心なく黨を結ぶ心よりキリ

十七 ストを宣<sup>のたま</sup>ハ此<sup>こ</sup>の我が福音を辨明する爲に立られしことを知り愛心よりキ

十八 リストを宣<sup>のたま</sup>ハ然らバ如何孰にもわれ或<sup>ある</sup>に偽ある以<sup>も</sup>ハ誠<sup>まこと</sup>どもに宣る所<sup>ところ</sup>ハキ

十九 リストなれバ我れこれを喜ぶ且<sup>かつ</sup>つねに喜べん<sup>よろこ</sup>十五 蓋<sup>かき</sup>この事の<sup>こと</sup>爾曹の<sup>なんぢ</sup>祈禱<sup>いのち</sup>とノ

二十 エスキリストの靈の助<sup>たすけ</sup>に因て終に我が救となる可<sup>べ</sup>を知<sup>し</sup>バ也<sup>なり</sup>二十 是<sup>こ</sup>れわが切

二十一 に願ふところ望<sup>ぞら</sup>どころ即ち我が凡<sup>みな</sup>の事に愧<sup>かたじけ</sup>なることなく今も常<sup>つね</sup>の如く隠<sup>かく</sup>せ

二十二 空<sup>くわ</sup>生<sup>せい</sup>るに<sup>も</sup>死<sup>し</sup>るに<sup>も</sup>キリストをして我が身<sup>み</sup>に因て辱められしめん<sup>おとし</sup>と意<sup>い</sup>ふ

二十三 に應<sup>こた</sup>へり<sup>も</sup>三<sup>さん</sup>わが生<sup>い</sup>るハキリストの爲<sup>ため</sup>また死<sup>し</sup>るも我が益<sup>えき</sup>なり<sup>なり</sup>三 然<sup>しか</sup>んば肉體に

ヨ 琳三〇、一、  
羅四〇、二

テ 可九〇、廿八至四十六  
哥後二〇、十一

エ 徒四〇、十六  
琳六〇、九

ウ 徒廿〇、廿四至三十三  
ノ 加三〇、  
ノ 羅五〇、六、八

十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二

在て生<sup>い</sup>ること者わが工<sup>わざ</sup>の果<sup>はた</sup>を結ぶ根本<sup>もと</sup>となるべく<sup>なり</sup>ハ何を撰<sup>えら</sup>ぶべきか我<sup>われ</sup>て

三 我<sup>われ</sup>を知<sup>し</sup>ず<sup>なり</sup>我<sup>われ</sup>の二<sup>ふた</sup>の間に介<sup>ま</sup>れたり<sup>なり</sup>我が願<sup>ねが</sup>ハ世<sup>よ</sup>を逝<sup>や</sup>てキリストと共<sup>とも</sup>に在<sup>あ</sup>り

四 人<sup>ひと</sup>の<sup>こゝろ</sup>也<sup>なり</sup>之<sup>の</sup>れ最<sup>た</sup>美<sup>うつく</sup>事<sup>こと</sup>なり<sup>なり</sup>三 然<sup>しか</sup>んば我<sup>われ</sup>が肉<sup>にく</sup>体<sup>たい</sup>に居<sup>い</sup>るハ爾曹<sup>なんぢ</sup>の爲<sup>ため</sup>め更<sup>さら</sup>に必要<sup>ひつ</sup>

五 なり<sup>なり</sup>三 五 われ深<sup>こゝろ</sup>く<sup>こゝろ</sup>此事<sup>こと</sup>を信<sup>ま</sup>するが故<sup>ゆゑ</sup>に存<sup>ぞん</sup>へて爾曹<sup>なんぢ</sup>衆<sup>しゆ</sup>の人<sup>ひと</sup>と共<sup>とも</sup>に世<sup>よ</sup>に住<sup>すま</sup>ハ

六 をして信<sup>ま</sup>仰<sup>う</sup>を益<sup>えき</sup>しめ<sup>め</sup>信<sup>ま</sup>仰<sup>う</sup>より出<sup>い</sup>る喜<sup>よろこ</sup>びを得<sup>え</sup>しむるに至<sup>いた</sup>らんことを知<sup>し</sup>三 六

七 我<sup>われ</sup>再<sup>また</sup>び爾曹<sup>なんぢ</sup>と共<sup>とも</sup>に居<sup>い</sup>バ爾曹<sup>なんぢ</sup>の喜<sup>よろこ</sup>びわれに因<sup>よ</sup>てイエスキリストの中に益<sup>えき</sup>

八 大<sup>おほ</sup>ならん<sup>なり</sup>三 七 我<sup>われ</sup>た<sup>た</sup>爾曹<sup>なんぢ</sup>にキリストの福音<sup>きんぷん</sup>に符<sup>あ</sup>ふ行<sup>ぎやう</sup>をせんとを勵<sup>む</sup>む是<sup>こ</sup>れわが

九 往<sup>ゆ</sup>て爾曹<sup>なんぢ</sup>を見<sup>み</sup>んども離<sup>はな</sup>れて爾曹<sup>なんぢ</sup>の事<sup>こと</sup>を聞<sup>き</sup>て<sup>なり</sup>三 八 爾曹<sup>なんぢ</sup>が靈<sup>たま</sup>を一<sup>いつ</sup>にして堅<sup>かた</sup>く立<sup>た</sup>

十 福音<sup>きんぷん</sup>の道<sup>みち</sup>の爲<sup>ため</sup>に心<sup>こゝろ</sup>を同<sup>どう</sup>らして力<sup>ちから</sup>を協<sup>あ</sup>はせて<sup>なり</sup>三 九 凡<sup>みな</sup>の事<sup>こと</sup>に<sup>つ</sup>き敵<sup>かたが</sup>に驚<sup>おど</sup>かさざら

十一 んことを知<sup>し</sup>ん爲<sup>ため</sup>なり<sup>なり</sup>凡<sup>みな</sup>て敵<sup>かたが</sup>に驚<sup>おど</sup>かさざるハ敵<sup>かたが</sup>のハ亡<sup>な</sup>すの<sup>き</sup>徴<sup>しるし</sup>なんぢらに<sup>つ</sup>救<sup>すく</sup>

十二 徴<sup>しるし</sup>なり<sup>なり</sup>是<sup>こ</sup>れ神<sup>かみ</sup>より來<sup>き</sup>るなり<sup>なり</sup>三 十 爾曹<sup>なんぢ</sup>も賜<sup>たま</sup>ふ所<sup>ところ</sup>の恩<sup>めぐみ</sup>ハキリストの爲<sup>ため</sup>に第<sup>だ</sup>二

十三 我<sup>われ</sup>を信<sup>ま</sup>すること而<sup>しか</sup>んば亦<sup>また</sup>これ<sup>こゝろ</sup>が爲<sup>ため</sup>に苦<sup>くるしみ</sup>を受<sup>う</sup>けることをも賜<sup>たま</sup>ふべ也<sup>なり</sup>三

十四 今<sup>いま</sup>なんぢらに患<sup>あや</sup>難<sup>がた</sup>あり<sup>なり</sup>即<sup>すなは</sup>ち曩<sup>なほ</sup>に爾曹<sup>なんぢ</sup>が聞<sup>き</sup>て<sup>なり</sup>三 十一 我<sup>われ</sup>に<sup>つ</sup>き患<sup>あや</sup>難<sup>がた</sup>と<sup>も</sup>同<sup>どう</sup>じ

カ 提後四〇、六  
三 提後四〇、十三、十四、十六

ヤ 提後四〇、七、七

ウ 提後二〇、十、十

ク 提後二〇、

エ 提後四〇、十二、十四、十五、十五、十六、十七

フ 提後四〇、十一、提後三〇、三

セ 提後三〇、十九、第二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十

キ	三〇三
エ	三〇三
ミ	三〇三
シ	三〇三
ハ	三〇三
ニ	三〇三
三	三〇三
四	三〇三
五	三〇三
六	三〇三
七	三〇三
八	三〇三
九	三〇三
十	三〇三
十一	三〇三
十二	三〇三
十三	三〇三
十四	三〇三
十五	三〇三
十六	三〇三
十七	三〇三
十八	三〇三
十九	三〇三
二十	三〇三
二十一	三〇三
二十二	三〇三
二十三	三〇三
二十四	三〇三
二十五	三〇三
二十六	三〇三
二十七	三〇三
二十八	三〇三
二十九	三〇三
三十	三〇三
三十一	三〇三
三十二	三〇三
三十三	三〇三
三十四	三〇三
三十五	三〇三
三十六	三〇三
三十七	三〇三
三十八	三〇三
三十九	三〇三
四十	三〇三
四十一	三〇三
四十二	三〇三
四十三	三〇三
四十四	三〇三
四十五	三〇三
四十六	三〇三
四十七	三〇三
四十八	三〇三
四十九	三〇三
五十	三〇三
五十一	三〇三
五十二	三〇三
五十三	三〇三
五十四	三〇三
五十五	三〇三
五十六	三〇三
五十七	三〇三
五十八	三〇三
五十九	三〇三
六十	三〇三
六十一	三〇三
六十二	三〇三
六十三	三〇三
六十四	三〇三
六十五	三〇三
六十六	三〇三
六十七	三〇三
六十八	三〇三
六十九	三〇三
七十	三〇三
七十一	三〇三
七十二	三〇三
七十三	三〇三
七十四	三〇三
七十五	三〇三
七十六	三〇三
七十七	三〇三
七十八	三〇三
七十九	三〇三
八十	三〇三
八十一	三〇三
八十二	三〇三
八十三	三〇三
八十四	三〇三
八十五	三〇三
八十六	三〇三
八十七	三〇三
八十八	三〇三
八十九	三〇三
九十	三〇三
九十一	三〇三
九十二	三〇三
九十三	三〇三
九十四	三〇三
九十五	三〇三
九十六	三〇三
九十七	三〇三
九十八	三〇三
九十九	三〇三
百	三〇三

我らに於ける今、特に然すべき也。主の神の善旨を行ふに、爾曹の衷  
 にはたらき、爾曹をして志をたて、事を行はむ。凡のこのこと、怨言と  
 なく、又争辯と無して行ふべし。此れ、爾曹が玷なく、雑なく、神の子となり  
 曲れる邪なる時代に在て責むべき所ならず。爾曹は此時代に在て、光  
 の如く世に顯之れ、生命の道を保てり。斯てキリストの日の爲に我をして  
 我が行ひしところ、勞苦し、所のこの徒然ならざるを喜べしめよ。爾曹の  
 信仰を供物として獻ぐに、假ひ我が血を流して、濯ぎ、我れこれを喜べ、爾  
 曹衆の人と共に喜べ、爾曹も之が爲に喜べ、我と共に喜べ、我れなら  
 が事情をまもり、心を慰めんがため、速かに「ラモテ」を爾曹に遣さんことを主、  
 エズに頼りて望む。手蓋かれの外に我れと同じ心を以て、爾曹の事を眞實に慮る  
 者なれば、凡の多くの人、皆おのが事のみを求めて、イエスキリストの事を  
 求めず。然して「ラモテ」の鐵鍊なること、ハ、爾曹の知るところなり。彼ハ子の交に  
 於る如く、我れと共に福音の爲に勤たり。主、是故に我れおのが事の終に如何なる

我らに於ける今、特に然すべき也。主の神の善旨を行ふに、爾曹の衷  
 にはたらき、爾曹をして志をたて、事を行はむ。凡のこのこと、怨言と  
 なく、又争辯と無して行ふべし。此れ、爾曹が玷なく、雑なく、神の子となり  
 曲れる邪なる時代に在て責むべき所ならず。爾曹は此時代に在て、光  
 の如く世に顯之れ、生命の道を保てり。斯てキリストの日の爲に我をして  
 我が行ひしところ、勞苦し、所のこの徒然ならざるを喜べしめよ。爾曹の  
 信仰を供物として獻ぐに、假ひ我が血を流して、濯ぎ、我れこれを喜べ、爾  
 曹衆の人と共に喜べ、爾曹も之が爲に喜べ、我と共に喜べ、我れなら  
 が事情をまもり、心を慰めんがため、速かに「ラモテ」を爾曹に遣さんことを主、  
 エズに頼りて望む。手蓋かれの外に我れと同じ心を以て、爾曹の事を眞實に慮る  
 者なれば、凡の多くの人、皆おのが事のみを求めて、イエスキリストの事を  
 求めず。然して「ラモテ」の鐵鍊なること、ハ、爾曹の知るところなり。彼ハ子の交に  
 於る如く、我れと共に福音の爲に勤たり。主、是故に我れおのが事の終に如何なる

ハ	一〇三
ニ	一〇三
三	一〇三
四	一〇三
五	一〇三
六	一〇三
七	一〇三
八	一〇三
九	一〇三
十	一〇三
十一	一〇三
十二	一〇三
十三	一〇三
十四	一〇三
十五	一〇三
十六	一〇三
十七	一〇三
十八	一〇三
十九	一〇三
二十	一〇三
二十一	一〇三
二十二	一〇三
二十三	一〇三
二十四	一〇三
二十五	一〇三
二十六	一〇三
二十七	一〇三
二十八	一〇三
二十九	一〇三
三十	一〇三
三十一	一〇三
三十二	一〇三
三十三	一〇三
三十四	一〇三
三十五	一〇三
三十六	一〇三
三十七	一〇三
三十八	一〇三
三十九	一〇三
四十	一〇三
四十一	一〇三
四十二	一〇三
四十三	一〇三
四十四	一〇三
四十五	一〇三
四十六	一〇三
四十七	一〇三
四十八	一〇三
四十九	一〇三
五十	一〇三
五十一	一〇三
五十二	一〇三
五十三	一〇三
五十四	一〇三
五十五	一〇三
五十六	一〇三
五十七	一〇三
五十八	一〇三
五十九	一〇三
六十	一〇三
六十一	一〇三
六十二	一〇三
六十三	一〇三
六十四	一〇三
六十五	一〇三
六十六	一〇三
六十七	一〇三
六十八	一〇三
六十九	一〇三
七十	一〇三
七十一	一〇三
七十二	一〇三
七十三	一〇三
七十四	一〇三
七十五	一〇三
七十六	一〇三
七十七	一〇三
七十八	一〇三
七十九	一〇三
八十	一〇三
八十一	一〇三
八十二	一〇三
八十三	一〇三
八十四	一〇三
八十五	一〇三
八十六	一〇三
八十七	一〇三
八十八	一〇三
八十九	一〇三
九十	一〇三
九十一	一〇三
九十二	一〇三
九十三	一〇三
九十四	一〇三
九十五	一〇三
九十六	一〇三
九十七	一〇三
九十八	一〇三
九十九	一〇三
百	一〇三

我らに於ける今、特に然すべき也。主の神の善旨を行ふに、爾曹の衷  
 にはたらき、爾曹をして志をたて、事を行はむ。凡のこのこと、怨言と  
 なく、又争辯と無して行ふべし。此れ、爾曹が玷なく、雑なく、神の子となり  
 曲れる邪なる時代に在て責むべき所ならず。爾曹は此時代に在て、光  
 の如く世に顯之れ、生命の道を保てり。斯てキリストの日の爲に我をして  
 我が行ひしところ、勞苦し、所のこの徒然ならざるを喜べしめよ。爾曹の  
 信仰を供物として獻ぐに、假ひ我が血を流して、濯ぎ、我れこれを喜べ、爾  
 曹衆の人と共に喜べ、爾曹も之が爲に喜べ、我と共に喜べ、我れなら  
 が事情をまもり、心を慰めんがため、速かに「ラモテ」を爾曹に遣さんことを主、  
 エズに頼りて望む。手蓋かれの外に我れと同じ心を以て、爾曹の事を眞實に慮る  
 者なれば、凡の多くの人、皆おのが事のみを求めて、イエスキリストの事を  
 求めず。然して「ラモテ」の鐵鍊なること、ハ、爾曹の知るところなり。彼ハ子の交に  
 於る如く、我れと共に福音の爲に勤たり。主、是故に我れおのが事の終に如何なる

我らに於ける今、特に然すべき也。主の神の善旨を行ふに、爾曹の衷  
 にはたらき、爾曹をして志をたて、事を行はむ。凡のこのこと、怨言と  
 なく、又争辯と無して行ふべし。此れ、爾曹が玷なく、雑なく、神の子となり  
 曲れる邪なる時代に在て責むべき所ならず。爾曹は此時代に在て、光  
 の如く世に顯之れ、生命の道を保てり。斯てキリストの日の爲に我をして  
 我が行ひしところ、勞苦し、所のこの徒然ならざるを喜べしめよ。爾曹の  
 信仰を供物として獻ぐに、假ひ我が血を流して、濯ぎ、我れこれを喜べ、爾  
 曹衆の人と共に喜べ、爾曹も之が爲に喜べ、我と共に喜べ、我れなら  
 が事情をまもり、心を慰めんがため、速かに「ラモテ」を爾曹に遣さんことを主、  
 エズに頼りて望む。手蓋かれの外に我れと同じ心を以て、爾曹の事を眞實に慮る  
 者なれば、凡の多くの人、皆おのが事のみを求めて、イエスキリストの事を  
 求めず。然して「ラモテ」の鐵鍊なること、ハ、爾曹の知るところなり。彼ハ子の交に  
 於る如く、我れと共に福音の爲に勤たり。主、是故に我れおのが事の終に如何なる

二四	テ堅く信ず然も我かならず先んたるの使にて我が乏を補ひ我と同等
二五	に撃き我と同等に戦をなせる我が兄弟エバフロゼトを爾曹に遺さざる可ら
二六	すど意へり蓋かれ己が曩に病たる事の爾曹に聞えしを以て深く爾曹衆
二七	の人を懸慕かつ憂悶をれば也言實に彼病に遇て殆ん死に近けり然
二八	神これ憐み給へり惟かれを憐むのみならず我をも憐み我をして我が憂
二九	に憂を重きらしむ言是故に我いよ速かに彼を遣はん是爾曹をして再
三〇	び彼を見て喜べしめ且わが憂を滅さんが爲なり然バ爾曹主により喜び
三一	て彼を迎かつ此の如き人を尊ぶべし蓋かれ己が命を願ふ死んとする
三二	バかりキリストの爲に倒き爾曹が我を助る所の缺を補ひたれば也
三三	爾曹終に我これ言ん我が兄弟よ爾曹主に在て喜べ我この事を爾曹に
三四	書おくるハ我に煩勞なく爾曹に益ありニ爾曹犬を憤め惡を行ふ者を憤め
三五	テ割を行ふ者を憤め三ろハ神の靈に由て役事をなしキリストイエスに由て

二四  
 テ堅く信ず然も我かならず先んたるの使にて我が乏を補ひ我と同等  
 二五  
 に撃き我と同等に戦をなせる我が兄弟エバフロゼトを爾曹に遺さざる可ら  
 二六  
 すど意へり蓋かれ己が曩に病たる事の爾曹に聞えしを以て深く爾曹衆  
 二七  
 の人を懸慕かつ憂悶をれば也言實に彼病に遇て殆ん死に近けり然  
 二八  
 神これ憐み給へり惟かれを憐むのみならず我をも憐み我をして我が憂  
 二九  
 に憂を重きらしむ言是故に我いよ速かに彼を遣はん是爾曹をして再  
 三〇  
 び彼を見て喜べしめ且わが憂を滅さんが爲なり然バ爾曹主により喜び  
 三一  
 て彼を迎かつ此の如き人を尊ぶべし蓋かれ己が命を願ふ死んとする  
 三二  
 バかりキリストの爲に倒き爾曹が我を助る所の缺を補ひたれば也  
 三三  
 爾曹終に我これ言ん我が兄弟よ爾曹主に在て喜べ我この事を爾曹に  
 三四  
 書おくるハ我に煩勞なく爾曹に益ありニ爾曹犬を憤め惡を行ふ者を憤め  
 三五  
 テ割を行ふ者を憤め三ろハ神の靈に由て役事をなしキリストイエスに由て

ム 羅一〇七二  
 後一〇八五  
 後一〇九二

ノ 非 一七〇三  
 後一七〇七

ハ 羅一〇三  
 後一〇六

ヲ 羅一〇三  
 後一〇六

ヌ 後一〇三  
 後一〇六

エ 羅一〇三  
 後一〇六

キ 後一〇三  
 後一〇六

四

五

六

七

八

九

十

十一

誇り肉身に恃ざる我憐み眞の割禮を受たる者なれば也然も我も肉  
 身に恃て得たり若し人肉身に恃て得と意ハ我ハ更に恃て得  
 なり我ハ第八日に割禮を受たる者にしてイスラエルの族ニヤミンの  
 支派ヘブル人より生たるヘブル人なり律法に由ババリスの熱心に  
 由バ教會を窘迫もの律法に在てこの義に由バ玷なき者なり然も我  
 きに我が益となりし所の事ハキリストに由て損わりと意へり然のみな  
 らず我わが主キリストイエスを識を以て最も益れる事とするが故に凡の  
 ものを損とせず我かれの爲に既に此等の凡のものを損せしかん之を業士  
 の如く意へり是キリストを獲かつ信仰に基きて神より出る義すなり  
 律法に因る己が義に非ずキリストを信するに由る所の義を有てキリス  
 の中に居たまはれ彼と其復生の能力を知りて彼の死の狀に循ひて彼の苦に與  
 士魂に角にも死たる者の健てとを得んが爲なり我これらの望を既に  
 得たりと言に非ず亦すでに空せられたりと言に非ず或ハ取てとあらん也

羅一〇三  
 後一〇六

羅一〇三  
 後一〇六

羅一〇三  
 後一〇六

羅一〇三  
 後一〇六

羅一〇三  
 後一〇六

羅一〇三  
 後一〇六

羅一〇三  
 後一〇六

十三	我た之を追求むキリスト之を得させんと我を執へ給へる也三兄弟よ
十四	我みづから之を取りて意ハす惟この一事を務む即ち後に在もの忘れ前
十五	に在ものを望みキリストイエスに由て上へ召て賜ふ所の褒美を得ん
十六	足標準に向ひて進なり是故に我儕の中すべて全者ハ此の如き意を懐べ
十七	し爾曹もし何事に由ず異なる意を懐かば之をも神なんぢらに示し給はん
十八	然我儕すでは到れる所にありて同法に遵ひて行ふべし三兄弟よ爾曹
十九	み亦我に效ふ者ぞなれ且なんぢらの模楷となる我儕に循ひて行をなす者
二十	を視よ大蓋われ屢々なんぢらに告げ今また涙を流して爾曹に告る如くキ
二十一	リストの十字架に敵して行ふ者多けれバ也三兄弟の終ハ滅亡なり己が腹
二十二	を其神となし己が羞辱を其榮となす彼等ハ惟世の事をのみ念へり三我儕
二十三	の國ハ天に在われらハ救主即ちイエスキリストの其處より來るを待三彼
二十四	ハ萬物を己に服ハせうる能に由て我儕が身キ體を化て其榮光の體に象ら
二十五	一節九〇廿四至七
二十六	一節九〇廿五至七
二十七	一節九〇廿六至七
二十八	一節九〇廿七至七
二十九	一節九〇廿八至七
三十	一節九〇廿九至七
三十一	一節九〇三十至七
三十二	一節九〇三十一至七
三十三	一節九〇三十二至七
三十四	一節九〇三十三至七
三十五	一節九〇三十四至七
三十六	一節九〇三十五至七
三十七	一節九〇三十六至七
三十八	一節九〇三十七至七
三十九	一節九〇三十八至七
四十	一節九〇三十九至七
四十一	一節九〇四十至七
四十二	一節九〇四十一至七
四十三	一節九〇四十二至七
四十四	一節九〇四十三至七
四十五	一節九〇四十四至七
四十六	一節九〇四十五至七
四十七	一節九〇四十六至七
四十八	一節九〇四十七至七
四十九	一節九〇四十八至七
五十	一節九〇四十九至七
五十一	一節九〇五十至七
五十二	一節九〇五十一至七
五十三	一節九〇五十二至七
五十四	一節九〇五十三至七
五十五	一節九〇五十四至七
五十六	一節九〇五十五至七
五十七	一節九〇五十六至七
五十八	一節九〇五十七至七
五十九	一節九〇五十八至七
六十	一節九〇五十九至七
六十一	一節九〇六十至七
六十二	一節九〇六十一至七
六十三	一節九〇六十二至七
六十四	一節九〇六十三至七
六十五	一節九〇六十四至七
六十六	一節九〇六十五至七
六十七	一節九〇六十六至七
六十八	一節九〇六十七至七
六十九	一節九〇六十八至七
七十	一節九〇六十九至七

我た之を追求むキリスト之を得させんと我を執へ給へる也三兄弟よ  
 我みづから之を取りて意ハす惟この一事を務む即ち後に在ものを忘れ前  
 に在ものを望みキリストイエスに由て上へ召て賜ふ所の褒美を得ん  
 足標準に向ひて進なり是故に我儕の中すべて全者ハ此の如き意を懐べ  
 し爾曹もし何事に由ず異なる意を懐かば之をも神なんぢらに示し給はん  
 然我儕すでは到れる所にありて同法に遵ひて行ふべし三兄弟よ爾曹  
 み亦我に效ふ者ぞなれ且なんぢらの模楷となる我儕に循ひて行をなす者  
 を視よ大蓋われ屢々なんぢらに告げ今また涙を流して爾曹に告る如くキ  
 リストの十字架に敵して行ふ者多けれバ也三兄弟の終ハ滅亡なり己が腹  
 を其神となし己が羞辱を其榮となす彼等ハ惟世の事をのみ念へり三我儕  
 の國ハ天に在われらハ救主即ちイエスキリストの其處より來るを待三彼  
 ハ萬物を己に服ハせうる能に由て我儕が身キ體を化て其榮光の體に象ら  
 しひべし

一	機前二十至九
二	出書二〇廿七至二〇廿九
三	三〇五廿二至七至二〇
四	九
五	一節四〇七
六	一節四〇八
七	一節四〇九
八	一節四一〇
九	一節四一一
十	一節四一二
十一	一節四一三
十二	一節四一四
十三	一節四一五
十四	一節四一六
十五	一節四一七
十六	一節四一八
十七	一節四一九
十八	一節四二〇
十九	一節四二一
二十	一節四二二
二十一	一節四二三
二十二	一節四二四
二十三	一節四二五
二十四	一節四二六
二十五	一節四二七
二十六	一節四二八
二十七	一節四二九
二十八	一節四三〇
二十九	一節四三一
三十	一節四三二
三十一	一節四三三
三十二	一節四三四
三十三	一節四三五
三十四	一節四三六
三十五	一節四三七
三十六	一節四三八
三十七	一節四三九
三十八	一節四四〇
三十九	一節四四一
四十	一節四四二
四十一	一節四四三
四十二	一節四四四
四十三	一節四四五
四十四	一節四四六
四十五	一節四四七
四十六	一節四四八
四十七	一節四四九
四十八	一節四五〇
四十九	一節四五一
五十	一節四五二
五十一	一節四五三
五十二	一節四五四
五十三	一節四五五
五十四	一節四五六
五十五	一節四五七
五十六	一節四五八
五十七	一節四五九
五十八	一節四五〇
五十九	一節四五一
六十	一節四五二
六十一	一節四五三
六十二	一節四五四
六十三	一節四五五
六十四	一節四五六
六十五	一節四五七
六十六	一節四五八
六十七	一節四五九
六十八	一節四六〇
六十九	一節四六一
七十	一節四六二
七十一	一節四六三
七十二	一節四六四
七十三	一節四六五
七十四	一節四六六
七十五	一節四六七
七十六	一節四六八
七十七	一節四六九
七十八	一節四七〇
七十九	一節四七一
八十	一節四七二
八十一	一節四七三
八十二	一節四七四
八十三	一節四七五
八十四	一節四七六
八十五	一節四七七
八十六	一節四七八
八十七	一節四七九
八十八	一節四八〇
八十九	一節四八一
九十	一節四八二

是故に我が愛するところ慕ふ所の兄弟われの喜われの憂たる我が  
 愛する者よ今わが觀る所に從ひて爾曹堅く主に立べしニ我ユウオザヤに  
 觀めストケに觀む彼等が主にありて心を同らせんとすわが眞の侶  
 よ請なんぢ此二人の婦等を助けよ彼等クレマンス及び他れ我が勞苦れ侶  
 なる人々ど力を協せ我儕と共に勤て福音を傳播たり彼等の名ハ生命の書  
 に録されある也 なんぢら常に主に在て喜べ我また言なんぢら喜ぶべし  
 かんぢら衆の人をして其寛容なることを知しめよ主に近し何事をもし  
 思ひ煩ふ勿れ唯毎事に祈禱をし懇求をし且感謝して己が求る所を神に告  
 り神より出て人の凡て思ふ所に過る平安ハ爾曹の心と意をキリストイ  
 エスに因て守らん 〇 兄弟よ終に我れこれと言ん凡う眞實なること凡う敬  
 ぶべき事おほよ公義と凡う清潔と凡う愛すべき事おほよ善稱ある事  
 すべて何なる徳いがある譽にても爾曹これを念ふべし なんぢら我より  
 學しどころ愛しどころ開しどころ見し所を皆おてな 然ハ平安の神爾曹

ラ 腓四〇一  
 ム 腓四〇二  
 ヲ 腓四〇三  
 非 腓四〇四  
 ノ 腓四〇五

二十  
 三二  
 三三  
 三三  
 三三

を以て爾曹の乏乏こそを補ひ給はん。願くは我儕の父なる神に世々榮あ  
 らんことをアマン。○三爾曹キリストにある聖徒おのゝに安を問われど  
 借にある兄弟等なんぢらに安を問り三諸の聖徒等なんぢらに安を問カ  
 サルの眷属のもの別て爾曹に安を問り三願くは我儕の主イエスキリスト  
 の恩なんぢら衆人と借に在んことをアマン

カ 腓四二〇九  
 目 腓四二一〇  
 目 腓四二一一  
 目 腓四二一二  
 目 腓四二一三  
 目 腓四二一四  
 目 腓四二一五  
 目 腓四二一六  
 目 腓四二一七  
 目 腓四二一八  
 目 腓四二一九  
 目 腓四二二〇  
 目 腓四二二一  
 目 腓四二二二  
 目 腓四二二三  
 目 腓四二二四  
 目 腓四二二五  
 目 腓四二二六  
 目 腓四二二七  
 目 腓四二二八  
 目 腓四二二九  
 目 腓四二三〇  
 目 腓四二三一  
 目 腓四二三二  
 目 腓四二三三  
 目 腓四二三四  
 目 腓四二三五  
 目 腓四二三六  
 目 腓四二三七  
 目 腓四二三八  
 目 腓四二三九  
 目 腓四三四〇  
 目 腓四三四一  
 目 腓四三四二  
 目 腓四三四三  
 目 腓四三四四  
 目 腓四三四五  
 目 腓四三四六  
 目 腓四三四七  
 目 腓四三四八  
 目 腓四三四九  
 目 腓四三五〇  
 目 腓四三五一  
 目 腓四三五二  
 目 腓四三五三  
 目 腓四三五四  
 目 腓四三五五  
 目 腓四三五六  
 目 腓四三五七  
 目 腓四三五八  
 目 腓四三五九  
 目 腓四三六〇  
 目 腓四三六一  
 目 腓四三六二  
 目 腓四三六三  
 目 腓四三六四  
 目 腓四三六五  
 目 腓四三六六  
 目 腓四三六七  
 目 腓四三六八  
 目 腓四三六九  
 目 腓四三七〇  
 目 腓四三七一  
 目 腓四三七二  
 目 腓四三七三  
 目 腓四三七四  
 目 腓四三七五  
 目 腓四三七六  
 目 腓四三七七  
 目 腓四三七八  
 目 腓四三七九  
 目 腓四三八〇  
 目 腓四三八一  
 目 腓四三八二  
 目 腓四三八三  
 目 腓四三八四  
 目 腓四三八五  
 目 腓四三八六  
 目 腓四三八七  
 目 腓四三八八  
 目 腓四三八九  
 目 腓四三九〇  
 目 腓四三九一  
 目 腓四三九二  
 目 腓四三九三  
 目 腓四三九四  
 目 腓四三九五  
 目 腓四三九六  
 目 腓四三九七  
 目 腓四三九八  
 目 腓四三九九  
 目 腓四四〇〇

十九  
 六六  
 六七  
 六八  
 六九  
 七〇  
 七一  
 七二  
 七三  
 七四  
 七五  
 七六  
 七七  
 七八  
 七九  
 八〇  
 八一  
 八二  
 八三  
 八四  
 八五  
 八六  
 八七  
 八八  
 八九  
 九〇  
 九一  
 九二  
 九三  
 九四  
 九五  
 九六  
 九七  
 九八  
 九九  
 一〇〇

○十我爾曹が我を思ふ心の今また漸く萌しを主に因て甚だ  
 喜べり爾曹の素より我を念ふたれども機を得ざりし也。一われ乏に因て之  
 を言に非ず蓋われ何なる狀に居もうれを以て足り足する事を學べ。二也。三  
 われ貧賤に居の道を知ま。四富厚に居の道を知り飽乏も豊乏も  
 も歎こども諸の事に於て我これを熱せり。五我に力を予るキリスト  
 に因て諸の事を爲得るなり。六然然も我が艱難の際に我が助を爲し。七誠  
 善。八ピリビ人。九爾曹もまた知わが福音を傳る始め。十ケドニヤを離れ去る  
 ども授受をなして我を助けし者。十一唯爾曹のみにして他の教會。十二此事なか  
 り。十三爾曹の我テサロニケに在し。十四度ならず。十五二度までも人を遣はし  
 我が乏を助けたり。十六われ饑贈を求るに非ず。十七唯なんぢらが益になる果の樂  
 からんことを求るなり。十八我に諸物うなひりて餘わり我す。十九エバロ  
 テトの手より馨香にして神の享給ふ。二十こ。二十一概給ふ所の祭物なる爾曹の  
 饑贈を受て足り。夫わが神の己の富に從ひてキリストイエスにより榮光